

緒言

山本卓明

Takuaki YAMAMOTO

福岡大学医学部
整形外科教室

変性性股関節症の原因として、わが国では臼蓋形成不全が最多(80%程度)であることは周知の事実である。そのため、関節症進行の予防を目的とした保存療法を含めた多くの治療法が提唱されてきた。

そのうち、外科的治療法として骨盤骨切り術が考案され、日本においてもアプローチの違いなどを含め複数の術式が開発された。それぞれの術式の目指すところは、骨盤被覆および関節不安定性の改善で、完全に一致している。また、どの術式も良好な術後成績が報告されている。骨盤骨切り術の有用性は実証済みであり、多くの施設で本手術が行われている。

今回取り上げた骨盤骨切り術は以下のとおりである。

- ・ 外側アプローチを用いる、寛骨臼回転骨切り術、寛骨臼移動術。
- ・ 内側アプローチを用いる、Curved Periacetabular Osteotomy と Spherical Periacetabular Osteotomy,
- ・ 上記の外側および内側アプローチに対するナビゲーション

本特集の特徴として、術後成績という観点から少し離れ、それぞれの術式の特徴、他の術式との相違点などを、特に、アプローチ、皮切、展開における筋損傷、骨切りライン、術後療法、合併症、などの観点から論述していただいた。これにより、それぞれの術式の特徴が明確になる。さらに、どの骨盤骨切り術においても、一部の骨切りはブラインドでの処置を余儀なくされ、より安全かつ正確な骨切りを行う必要性を実感している術者も少なくない。その解決法の1つとして、ナビゲーション手術の有用性は高く、アプローチの違う2つの術式について、それぞれ解説いただいた。

本特集により、現在の日本における各種骨盤骨切り術の特徴が明確となり、術式選択を含めた今後の治療法の進歩につながれば幸いである。